



「受け」そして「継ぐ」

はじめての星陵祭はどうだったろう？ 残念ながら入賞は逃したが、●くん・●●くんのスピーチや、写真撮影でのみんなの満面の笑顔を見ていると、「寸前家族」はイイ思い出になったに違いない。

いつも私の予想よりも順位が一つ下なのは担任故のひいき目だろうか（笑）。体育祭も午前中は1位だったから、最終的には4位だろうと思っていたら5位だったし、合唱祭もさすがに1位になったクラスにはかなわないと思ったが、2位だろうと思っていたら3位だった。今回も、1学年の4クラスの演劇をみて、2番目に（笑）イイと思っていたので、●Rは見えていないが評判が高いことも踏まえて、3位だろうと思っていたのだが…。

＊

15Rの劇のイイところは、暗転がないところである。暗転は場面転換には確かに必要で、その結果、大きく場面（あるいはストーリー）が展開していく醍醐味があればイイのだが、ひどいクラスは暗転ばかりで場面は展開しないし、暗転をしなくても演出でカバーできるのに…などと思ったりすると、もうガッカリなのである。

その点、イイ舞台装置をつかってそれを最後まで生かし、しかも、照明を工夫することで途切れることなく劇が進行する今回の舞台は、演劇が好きな人がみれば、その素晴らしさをしっかりと理解してくれたはずである。最近はやりにミュージカルをやりたがる風潮があるが、こういう舞台こそが本当の劇であ

ると私は思う。

その劇そのものも、回数を重ねるごとに息もあい、所作やセリフにも工夫が見られ、照明や音響との連携も進んで、ドンドン良くなっていった。もう一日公演できれば、笑わせるツボをキッチリ押さえて、無理矢理にでも客席を笑わせる？ところまで行けたのではないかと思う。でも、逆にいえば、一日分準備不足だったということだ。セリフを頭にたたき込み、日程を調整して、もう少し役者全員での事前の通し稽古を繰り返すことができれば、もっともっとよくなったはずである。人の演技を見ることが、自分の演技の参考になるということもよく分かっただろう。

＊

台本を決めて編集したり、舞台デザインを構想したり、衣装や小物を工夫したり、ポスターやパンフレットのデザインを練ったり、照明やBGMを工夫したり、予算編成をしたり…そして、日程を調整し、計画を立て、連絡し…と、中心になる存在はいるとしても、全員がなんらかの形で関わりながら協力して創り上げる舞台は、やはり高校生にふさわしい総合芸術だと私は思う。その中で、コミュニケーションの力や時間を生かす力、交渉したり我慢したりする力、人を思いやる力などが育つのである。そういう困難なプロジェクトに、学校全体で取り組むというのは、本当に素晴らしい。だからこそ、来年はさらにバージョンアップした劇を創りあげ、日比谷の良さを「受け」「継い」でいってほしい。